

不登校・ひきこもりの子供支援に関する政策評価に係る研究会(第4回)

議事概要

1 日時：令和3年7月5日(月) 15:00~16:40

2 場所：WEBによる開催

3 出席者

- ・ 構成員 堀田座長、伊藤構成員、古賀構成員、芹澤構成員、深谷構成員、渡辺構成員
- ・ 総務省 評価監視官(財務、文部科学等担当)室

4 配付資料

- ・ 研究会報告書の最終案について

5 概要

事務局から、研究会報告書の最終案について説明が行われた後、意見交換が行われた。主な意見は以下のとおり。

- 資料1ページのタイトルについて、括弧書きで「調査設計の考え方」と記載があるが、具体の調査設計まではこの資料で触れていないので、表現を検討する必要があると思う。
- 資料2ページに「把握する効果」として最終アウトカムの記載があるが、この手前に中間アウトカムの内容を入れ、最終アウトカムに繋がるということに記載すると分かりやすいと思うので検討してはどうか。
- 「不登校・引きこもりの子供支援」という、政策評価という観点から難しいテーマに関して、ロジックモデルの作成を試み、方向性を示していくことは改めて大事であると感じた。
- 支援の対象者にもたくさんのタイプがあり、それによって、必要なアプローチも異なってくると思われるが、そういった個別の話がエビデンスという観点から最も求められてくると思う。このロジックモデルを出発点として個別の調査をして、ロジックモデルに跳ね返らせてフィードバック機能を持たせるということが、政策評価やEBPMという発想から役に立つと思う。
- 有効性の観点から、目的に照らした達成度があるかどうかを把握していくと思うが、予算や人材が無限ではないことから、コストパフォーマンスの効率性の観点はどのように捉えるのか。例えば、コロナの状況もあってオンライン化が進んでいるという状況で、繋ぎ人材の活躍やeラーニングなどの代替的なツールを活用しているケースは実態としてあると思う。
- このテーマに係る支援の場合、効率性ということをどのように考えるかということ自体、議論が必要で、一見短期間で見ると非効率であることが、長期間で見ると結果的には効率的ということもある分野だと思う。効率性という視点の捉え方そのものも、今後議論していく余地が大きいものと思う。
- 資料5ページの中間アウトカム②で「不登校の原因分析ができる」とされている部分について、原因が分からないことも多々あり、原因が分からなくても、最終的に子供自身が動き出したり次に繋がったりすることもある。必ずしも原因追及、原因解明だけでない、その子自身の気持ちや環境の理解も含めた広い概念になればよいと思う。

- 不登校の原因分析については、児童生徒の現状がしっかりと把握され、不登校の「原因」というより「理由」がきちんと分かり、その上でその理由を本人に前向きなメッセージとして支援者が伝えられているかどうかポイントだと思う。
- 不登校の原因をどれだけ細かく分析したかということが、本人にとっては必ずしも利益にならない時がある。一定の検討をして、迷いながらもたどり着いた状況が確認できたらいよいよという言い方が色々な場で使われるようになり、また、何に到達したかというよりは、回復できて自らで考えられるようになったということが大事だという言い方もされるようになってしまっている。なぜそうなるかという、人との出会いや良い場所への加入というコンティンジェントを前提にして、チャンス担保することが重要だからだと思う。
- 原因がはっきり分かるか否かということに着地するのはやはり無理だと思うので、原因らしきものをある程度一つ一つ確認していく作業が必要。なんでもかんでもチェックすると無限になってしまうので、いくつかの有限な条件の中から、その人にとってプライオリティが高いものを確認していくと、本人にとっての将来の可能性や回復という出口も保証できるのではないかと思う。
- 不登校の原因分析の部分について、ロジックモデルというのは、当事者の視点からというよりも客観的な視点から捉えられる流れを記載するのがよいと思う。その際に、一般的にこの問題がどのような背景になっているか掘り下げる段階が必要で、プライオリティや当事者の環境のアセスメントなどをよりミクロなロジックモデルとして構造化する部分が必要になると思う。
- 10代の子の自殺もデータとして増えていると思うが、自らの命を絶つことまで考えている子供達がどう思っているかという、最終アウトカムの「最適な居場所や教育の機会の確保」がないことというよりは、漠然として未来に絶望していることだと思う。そのため、子供達が現状や未来に絶望していない、未来に希望を持てると思えた後に、「最適な居場所や教育の機会の確保」があってもよいと思う。
- 資料5 ページの中間アウトカム③で「自らが取り得る選択肢について主体的に検討できる」とされている部分について、「主体的」でなくとも、例えば支援者と一緒に検討するという在り方もあると思うので、受け手によって限定的に受け止められない表現にできればよいと思う。
- 「主体的に検討」の部分について、進路であれば「主体的」という表現は確かにあると思うが、そうではない意味での「主体的」は少し重い印象。何かを探し出せるというニュアンスが込められればよいと思う。
- 子供達が主体的に選択・検討するためには、色々なタイプの支援者がいる必要があり、そのためには連携というものがきちんとなされているかどうかを見る必要がある。また、官民連携の中で、コーディネーターなどの何らかのハブを作ることも重要。
- 官は官、民は民でそれぞれ連携するケースが多く、官と民の間に溝があるということが結構あるので、その辺の有効性や適切性をきちんと測る必要があると思う。特に、官と民が対等・並立的であり、より良い情報交換の中で動いているような自治体は、子供達が主体的に選べる環境ができていると思う。
- 「主体的に検討」の部分について、「主体的」の記載により主観的なニュアンスが入ってくると思うが、これはあくまで理想として示されている。他方で、それが実際にできているかどうかを検証するというのであれば、これも一つの在り方だと思う。
- 個々の事例を掘り下げると、言葉で表記する部分の限界があるが、一つのロジックモデルという仕組みで捉えていく中で、少し幅を持たせた形で、ある程度弾力的なものとして、現場の実態に合

っているというのが理想。その含みを持たせた中で、一つのモデル、道筋の表記だという理解が得られればよいと思う。

- 組織とは単体で動いているイメージで、ネットワーキングというところで評価がきちんとされているものをあまり見たことがない。海外では、ネットワーク組織論というのが大きな領域となっており、その点ではすごく先端的な問題を扱っていると思う。
- 公的機関が十数団体集まるケース会議が月に1回開催されていても、情報共有に終わってしまうものもあり、連携の質をどうチェックするのが難しい課題だと思う。
- 連携するメンバーの中に、公的機関ではない市民の方の存在が入っていれば、子供の回復力などが格段に上がると感じる。また、公と民の間を自由に行き来できる繋ぎ人材が存在している地域とそうでない地域で効率性も異なると思う。
- 特定の 이슈に関わっている公的機関が複数あることによって、それぞれの連携がうまくいかない、意見が食い違っている、あるいは同じことを複数の組織がカバーしていること自体が冗長性やいわゆる二重行政の問題として議論になると思う。他方で、複数の組織がカバーしていることによって、お互いが情報を持っている、片方ができないことを別の方がやってくれる、キーパーソンがいるなどの状況は、見方を変えれば、貴重なリスクヘッジになっていると思う。キーパーソンがいるかどうかで状況が異なっているなどのばらつきは確かに出てくるかもしれないし、複数の機関が被っていることによって、むしろうまくいっているケースもあるかもしれず、そこを見ていくと、この分野における組織の連携の問題がどうなっているのか、貴重な知見、実践的な対応にも繋がると思う。
- 関係機関との連携はもちろん重要だが、学校内においても SC、コーディネーターなどの専門職もいるので、学校内組織の連携、チームのシステムの在り方、役割分担も重要だと思う。
- 個人情報をごどのように扱っているかというところは、このテーマに関しては慎重さが要求される。また、医学的な専門家だけが得る情報も存在するので、医療情報はほとんど入手できず、難しい壁が立ち上がる。どのレベルまで守秘しながらこの問題に踏み込んでいけるか、考えておくべき必要があると思う。

—以上—